カニバルワールド　前編

新種のウイルスにより、人肉以外が汚染された世界。
美女達は性交奴隷兼食肉として飼育される。

作者　大黒達也

カニバルワールド　前編

作者　大黒達也

『あらすじ』

西暦二千三十年七月、アメリカ国防総省の研究所で開発された新種のウィルスが、テロリストの犯行により、ばら撒かれる。新種のウィルスとは、人間の細胞をベースに造られたもので、敵国の農作物に被害を与えるために開発されたが、突然変異により人間を除く、すべての生命体に感染するようになる。人間が、ウィルスに感染した生物を摂取した場合、ウィルスが出す特殊な酵素により脳細胞が破壊される。

唯一、口にして安全なのは、人肉のみ……。

『登場人物』

木村（きむら）　真一（しんいち）

日本初代の大統領。日本の危機を救うために、策謀の限りを尽くす。

三神（みかみ）　マリア

二十代半ばにして、木村の秘書官兼ボディガードを勤める。木村を心から愛し、崇拝する。若くはちきれんばかりの肢体を持ち、人目を惹く美貌の中に、悪魔的な心を宿している。

熊谷（くまがや）　麗子（れいこ）

食肉研究所の所長。知的な美貌と高い知能の持ち主。研究用に捕らえた女達に残虐の限りを加える、究極のサ

ディスト。

加納（かのう）　沙織（さおり）

防衛研究所に所属する上級士官。　捕らえた中国女性兵士に性的虐待を加える。

イクソン

韓国駐日大使の一人息子。両親の知り合いである木村の養子として育てられる。

『目次』

プロローグ
第一章　韓国特殊部隊
第二章　開戦
第三章　食肉研究所

第四章　北京陥落
第五章　終戦
エピローグ

『本編』

プロローグ

西暦二千三十年七月、アメリカ合衆国、アリゾナ砂漠。中天に輝くギラギラと照りつくような太陽。容赦のない紫外線が降り注ぐ中、一台の軍用ジープがどこまでも続く一本道を、砂煙をあげながら疾走していた。米軍が、開発した軍用ジープ ハンビー七型に二十代後半の白人男二人と、二十歳を過ぎたばかりの白人女一人が、乗っていた。三人とも軍服に身を固めていた。女は輝くような金髪に、人目を惹く美貌の持ち主であった。

ジープは、広大無辺の砂漠の中に、突如出現した米陸軍研究所のゲート前に停車した。研究所は高さ五メートルの鉄条網によって、外界から隔てられていた。ゲートの向こう側は、芝生が敷き詰められた広大な敷地が広がっており、強化ガラスと鉄筋で組み立てられた無機質な感じの施設建物が見えた。

運転席の男が認識用のＩＤカードを、ゲート横のアンテナにかざすと、高さ五メートルの鋼鉄製の扉が、音も無く開いた。

その頃、研究所内の地下五階にある一室では、白人女二人が、ソファーの上で全裸となり、お互いを激しく求め合っていた。二人ともまだ、若く二十代半ばといったところだ。ひとりは流れるような金髪の持ち主で、もうひとりは黒髪だった。ふたりとも人目を惹くような美貌に、豊かな肢体を持っていた。

二人は、ともに国防総省から派遣された研究員で、細菌兵器を開発していた。

研究室には二十四時間フルの研究に備えて、シャワー

とトイレが備え付けられていた。二人は、昨晩遅くまで、研究室にこもり、新種のウィルスの研究に没頭していた。

研究は九割方完成していた。あとは、ウィルスを無力化するワクチンの開発を残すのみとなっていた。牛や豚といった家畜に感染し、百％の確立で死滅させるもので、交戦国の食料体系を破壊する目的であった。

人の細胞に寄生するウィルスを突然変異させたもので、人間には無害であった。研究成果は、フラスコに入れられ、隣室の研究用ロッカーに保管されていた。

「時間よ。シャロン」

金髪で長身の方が、相方の耳元で囁いた。

「お願い。もう一度だけ……。いいでしょうキャサリン」

少し小柄でグラマーな方が甘えた声で答えた。

「いいわよ。もう一度いかせてあげるわ」

キャサリンが、シャロンの太腿を押し広げ、サーモンピンクの膣に口を付け、舌を使い始めた。アヌスから膣口にかけて、入念に舐め回した。シャロンは歯を食いしばり、豊かな太股でキャサリンの頭を挟みこむようにして、シーツを固く握り締めていた。

「久しぶりだな。キャサリン」

キャサリンが、ソファーの上で、シャロンと抱き合った格好でドアの方を振向いた。

「ディック！貴方、何でここにいるの？」

軍服に身をかためた身長百八十センチの痩せた男が、戸口に立っていた。

「貴方は、ここを首になった筈よ。何しているの？」

「昼真っから、レズかい。いい気なもんだな」

女からディックと呼ばれた男は、冷たい笑みを浮かべながら、部屋に入ってきた。その後に、見慣れない二人の男女が続いた。三人とも、サブマシンガンで武装していた。

「出て行って！守衛を呼ぶわよ」

「あの一階にいたデカブツのことか？今ごろ天国に行っているさ。それとも地獄かな」

「何が目的なの？」

キャサリンとシャロンは立ち上がり、衣服を身に着けようとした。

「そのままでいるんだ！」

一味の女が、サブマシンガンで威嚇した。ディックが

二人を無視して、部屋の隅に置かれたパソコンの電源を入れた。懐からＵＳＢを取り出して、ＵＳＢポートに接続した。

「何するの！止めて」

キャサリンが騒ぎ出した。パソコンはサーバに繋がっており、そこには膨大な量の細菌兵器や化学兵器の研究成果が格納されていた。データの買い手は腐るほどいた。中近東や中国に高価な価格で売れる筈であった。

「マーク。エレナ。女達を静かにさせろ」

ディックは、パソコンを操作しながら、二メートル近くある長身で、がっちりとした体格の男に指示した。マークと呼ばれた男は、ふたりの女達を一諸に、羽交い絞めにして、床に押し倒した。足元に極上の裸身が震え戦

慄いていた。沁みひとつないすべすべの尻や乳房が、視線を貫いた。舌なめずりをしながら、ズボンを下ろし、パンツを脱いだ。禍々しい男根が天を突いていた。エレナも軍服を脱ぎ捨て全裸となった。豊かな乳房と形のいい尻が露になった。間髪をいれず、キャサリンに襲い掛かった。

「止めて！お願い。許して……」

乳房を鷲掴みにして、膣に指先を挿入し、荒々しくかき回した。先ほどまでシャロンと戯れていたためか、そこは熱く濡れていた。堪らなくなって、股間に顔を入れ、ズルズルという音を立てて膣を啜った。キャサリンが背筋を仰け反らせた。マークはシャロンを四つん這いにさせ、剥き卵のような尻の合間に顔を押し込んだ。若い女

の素晴らしい匂いが鼻腔を満たした。暫く舌でアヌスを嬲った後で、男根を挿入した。

「あああ……」

シャロンが仰け反り、鋭い呻き声をあげた。マークは激しい勢いで腰を使い始めた。キャサリンとシャロンは、屈辱と恐怖に怯え、顔を両手で覆い泣き喚いていた。暫くすると、二人の愛撫が巧みなせいか、次第に、泣き声が喘ぎ声にかわり始めた。その間、ディックは、パソコンに向かい、警備システムを通り抜け、サーバへのアクセスに成功していた。研究成果が格納されたドライブにアクセスし、持参したＵＳＢにコピーした。すべてを終え、ＵＳＢを懐に収め、満ち足りた表情で立ち上がった。

床では、マークとエレナが女達を獣のように犯してい

た。マークはシャロンの口内に射精したところであった。

エレナは、床に横たわったキャサリンの顔に跨り、アヌスを舐めさせていた。

「いい…。逝っちゃう！」

エレナが鋭い喘ぎ声をあげ、キャサリンの顔の上に突っ伏した。

「女達をどうする？」

マークが、立って皆の様子を眺めていたディックに尋ねた。

「殺せ」

一言だけ、言って、腰のポーチから、十五センチ四方の金属製の小箱を取り出した。それを壁に、ガムテープで張り付け、スイッチを押した。

「あと三十分で爆発する。急げ」

キャサリンとシャロンの顔が蒼白になった。肩がわなわなと震え始めた。マークがシャロンを四つん這いにさせて、自動拳銃の銃口をアヌスに押し当て、引き金を引いた。「パン」という乾いた音が響き、シャロンの裸身が跳ねた。床に転がったときは、既に虫の息であった。床に鮮血が、広がり始めた。

「止めて。殺さないで！」

キャサリンが立ち上がり、戸口に向かって走り出そうとした。エレナが目の前に立ち塞がり、羽交い絞めにした。テーブルの上に、仰向けの姿勢で横たえた。軍用ナイフを取り出し、太腿を押し広げた。膣に根元まで差し

込み、こねくり回した。

「ギャー！」

キャサリンは白目を剥いて失神した。エレナはキャサリンの盛り上がった白い乳房を鷲掴みにして根元にナイフの刃を当て、一気に切り取った。

「うっ……」

キャサリンが覚醒し、自分の血塗れの胸と、エレナの左手に握られた肉塊を見て再び意識を失った。エレナは残る乳房も切り取り、持ってきた軍用ポーチに詰めた。

「そんなものどうするんだ？」

ディックが怪訝な顔で、尋ねた。

「犬に食わせるのよ」

「お前が喰らうんじゃないのか？」

マークが横から口を挟んだ。

「悪い？若い女の柔肉は美味しいんだから」

キャサリンの柔肉を捌きながら、あっけらかんとした笑い声をあげた。

「気色悪い奴だ。早く済ませろ」

ディックが吐き棄てるように言った。エレナは鼻歌を歌いながら手馴れた手付きで、膣肉の切除にかかっていた。鋭い切っ先が、柔らかな膣肉を切り刻んだ。キャサリンは全身を震わせ、低い唸り声をあげ続けていた。視線は宙を漂っていた。生きたまま家畜のように解体されていった。膣肉を切り取り、うつ伏せにして、今度は、器用な手付きで尻肉を切り取りとっていった。尻肉をすべて切り取った後で、太腿肉を削ぎ始めた。主要な部分

を切り取って、腰のポーチに入りきらない肉は、ビニール袋に入れて、部屋にあったボストンバックに詰め込んだ。

「行くぞ。あと十分だ」

一行が立ち去った後には、キャサリンとシャロンの死体が無造作な感じで、置き捨てられていた。金属箱の表面で点灯していたＬＥＤが０を示した時、閃光が迸り、大音響とともに衝撃波が広がった。爆風が地下五階のすべてを破壊した。上階のスウリンクーラーが一斉に作動し、大量の水が床を覆っていった。

隣室にあった研究用ロッカーも、爆風でひしゃげ、一瞬でバラバラになった。中に入っていた新種のウィルスを入れたフラスコも粉々に砕け散った。

「大統領。米国からホットラインが繋がっています」

壁掛けＴＶに、黒皮のミニスカートに白いシャツを着た美貌の女性秘書官がうつっていた。

「わかった。こっちに繋いでくれ」

大統領と呼ばれた四十代前半に見える中肉中背の男が、椅子を回し壁掛けＴＶに向き直った。女性秘書官の美貌が、鷲鼻の逞しい顔をした初老の男に代わっていた。

「ジョージ。どうした？冴えない顔をして」

「木村……。緊急事態だ」

「……？」

「国防総省が秘密裏に開発していた新種のウィルスが、テロリストの破壊工作によってばら撒かれてしまった」

「何！」

初老の男から木村と呼ばれた男が、椅子から立ち上がった。

「どういうことだ？」

「私は知らなかったのだ。国防総省は大統領である私にもウィルスの存在を隠していたんだ」

「詳しく説明してくれ」

木村は椅子に座りなおした。

「そのウィルスというのは、敵国の食料生産に壊滅的な打撃を与えるために開発したものだ。米や麦等の穀物や、主要な野菜類、さらには牛や豚等の家畜類に感染し、死滅させるものだった」

「だったとは？」

「奴らは、ばら撒かれて三日で、突然変異をした。……人間以外のすべての生命体に感染するように」

「人間以外？」

「ウィルスは人間の細胞をベースに造られたものだ。人間自体には無害だ。しかし、ウィルスに感染した生物を摂取すると、脳細胞が破壊されてしまうことがわかった。皮肉なことに、死滅する筈の生物は、ウィルスと共存することがわかった」

「何！　……どのくらい広がっているんだ？」

「二ヶ月で、アメリカ全土に蔓延している。最悪の状況だ。木村。早く手を打て！」

「わかった。情報が入ったら連絡してくれ」

壁掛けＴＶの電源が切れた。木村は。数分間、官邸の

庭に広がる森を見るとはなしに見ていた。そして、思い直したように立ち上がった。

「マリア。ブレーンに召集をかけてくれ、それから議会のスケジュールも調整してくれ。それとアメリカ大陸以外の駐在大使に、大至急食糧を買い占めるように通達するんだ！」

木村の声に呼応するように壁掛けＴＶのスイッチが入り、先ほどの秘書官が映し出された。

「わかりました。大統領」

木村は、執務机に置かれた写真立てに視線を落とした。二十代後半に見える美しい女性と五歳位の女の子が、微笑んでいた。

木村は十年前、衆議院議員であった頃、爆弾テロにあ

い、最愛の妻と五歳になる一人娘を失っていた。その時受けた負傷のために左足は義足となっていた。

西暦二千二十七年、日本の政界は、修復不可能なまでに腐敗していた。国民は議会民主制から、強力なリーダシップが期待できる大統領制への移行を選択した。国民投票により、初代大統領として木村真一が選任された。

韓国から東へ三十キロの空域を、臨時の航空便が日本を目指して飛行していた。乗員はキャビンアテンダントと機長、副機長を合わせて五名であり、乗客は百人の日本人留学生が乗っていた。北京市のK女子大学に通う百名の留学生は、高まる政情悪化を避け帰路についていた。彼女達のほとんどが、政財界の有力者の子女であり、裕

福な家庭に育っていた。

臨時便の上方三千メートルから、レーダには写らない黒い陰が急速に迫りつつあった。差し渡し三十メートルほどの黒色の機体には垂直尾翼が無く、胴体にあたる部分も無かった。二十世紀後半にアメリカで開発されたステルス爆撃機に酷似していた。それが、臨時便の機体に覆い被さるようにして、ドッキングした。

「機長。上空から、何か、黒い影が接近してきます」

「私には、何も見えないが」

「確かです。空港に連絡しま……」

副機長は最後まで、言うことができなかった。擦過音がして額に小さな穴が穿たれ、白目を剥いて全身を震わせていた。機長の右手には、サイレンサー付きの自動拳

銃が握られていた。その時、軽い衝撃が襲い、機体が上下に揺れ動いた。ボーンという爆発音がして、続いて客室の方から留学生達があげる悲鳴が聞こえてきた。機内は、白い煙に満ちていた。煙を吸った女達は、バタバタとその場に倒れ伏した。天井の一部には、直径一メートルほどの穴が穿たれていた。そこから、防毒マスクを装着し、戦闘服に身を包んだ十数人の男達が降りてきた。さらにそこから、フック付きのベルトコンベアが下ろされた。男達は、椅子の上や通路に倒れている女達を、布製の袋に詰めて、ベルトコンベアで、穴の上に運んだ。百人の女子留学生と三人のスチワーデスすべてが、兵士達によって機外に連れ出されるのに、ものの五分とかからなかった。

最後に機長が、ベルトコンベアに乗り、穴の上に登った。

数秒後、国籍不明のステルス機は、臨時便から離れ、急激に高度を上げていった。その時、九千メートル下の海水面が泡立ち、一瞬後、一発の地対空ミサイルが飛び出してきた。一気に高度を上げて、無人の臨時便に突き刺さった。直径数百メートルに及ぶ光球が出現し、臨時便は、光の渦の中で消滅した。粉々になった破片が、日本海に降り注いだ。

大統領官邸の記者会見室には、大勢の記者団が詰めかけ、騒然となっていた。

大統領の木村真一が、会見室に現れると、一斉にデジタルカメラのシャッターが押された。

「大統領。民間航空機の墜落に中国軍が関与していると

いうのは、本当ですか！」

「……最悪の事態となりました」

ステージの上で紺色のスーツに身を包んだ木村が、記者団を見回した。

「我軍事衛星が、民間機が爆発した前後に、近海で中国軍の潜水艦がミサイルを発射する画像を撮影しています」

記者団に、写真を配布したが、画像が不鮮明であり、中国軍の潜水艦かどうか判定は困難であった。

「これでは、中国軍か特定するのは無理でしょう」

軍事ジャーナリストでもある記者が、不満げな声を漏らした。

「海上自衛隊が、中国軍の交信を傍受しています」

「民間機が、中国軍に撃墜されたということですか？」

「そんな……。戦争が始まってしまう……」

記者達の独り言が聞こえてきた。

「現在は、まだ調査中です。それが事故なのか、あるいは故意なのか。いずれにせよ。若い女子学生百名が、亡くなったという事実を重く受け止めなくてはいけません」

横浜に位置する中華街は、炎に包まれていた。前夜、日本中の報道機関が中国軍による民間航空機の撃墜事件を発表していた。記事に怒り狂った数千人の暴徒達が、中華街を襲撃し、中国人と見れば、男なら叩き殺し、女なら周知の中で強姦した。数名の男達が、乗用車からチ

ャイナドレスに身を包んだ若い女を引きずり出していた。

見る間に女を素っ裸に剥いて、身体中を舐め回し、穴という穴に指や棍棒を差し込んだ。意識が朦朧とした女に、まとわりつき男根で貫いた。

政府機関は、機動隊を出動させたが、暴徒達を中華街から外部に拡散することを防いだだけであった。

それに呼応するかのように北京でも日本人街が、数万人の暴徒に襲われた。

中国との合弁会社に勤務する佐藤卓也は、妻とともに、自宅マンションで就寝に付こうとしていた。突然、ドアが破られ、大勢の男女が侵入してきた。

佐藤は果敢にもゴルフパッドで、応戦したが敵の数が多すぎた。すぐにゴルフパッドは奪われ、床に押し倒さ

れた。手足を抑えつけられ、パジャマのズボンが降ろされた。男根に若い女が、喰い付いてきた。食い千切るような激しさで、しゃぶりまくられた。その時、寝室から妻　アリサの絶叫が聞こえてきた。寝室では、暴徒達によるアリサへの陵辱が始まっていた。二十四歳になる豊満な裸身がベッドに押さえつけられていた。複数の男女が纏わりつき、膣やアヌスを指や口で嬲り始めた。暴徒達は、アリサの美貌に興奮し、狂ったような愛撫を加えた。白くすべすべの太腿を極限まで押し広げ、女が膣に吸い付き舐め回し、男がアヌスに指先を入れ、かき回した。陵辱は全員が、欲望を吐き出すまで続けられた。

空が白み始める頃になって、アリサは陵辱から解放された。男の肩に担がれ、部屋を出た。盛り上がった白い

尻が、無残に震え慄いていた。朦朧とする意識の中で、床に倒れている夫の姿を認めた。夫は、全裸にされ男根を切り取られ、さらに頭部を割られており、既に絶命していた。男に担がれた状態のまま、自宅を出て、マンションの一階にある中華料理店の厨房に運ばれた。

長さニメートル、幅一メートルの調理台には、若い女が全裸姿で載せられていた。生きてはいるようだが、意識を失っていた。顔に見覚えがあった。同じマンションに住む日本人留学生で、名は大原　瞳といった。瞳は、二十歳になったばかりで、豊満な肢体と美貌の持ち主であった。陵辱の痕であろうか、剥き出しにされた膣が赤く腫れ上がっていた。何度か会話を交わしたことがあった。瞳の傍らで調理服に身を包み、頭が禿げ上がった中

年男が、中華包丁を研いでいた。男の背後には、水を張った大鍋とフライパンが火に掛けられていた。　アリサも、瞳の横に、横たえられた。

「二人ともいい女じゃないか。美味い肉が取れるぞ」

「日本女は、肉が柔らかいそうだ」

「そうか。涎が出てきたよ」

アリサには、不幸にも男達の広東語による会話を理解することができた。男達が自分達を調理して食らうことがわかった。全身に慄きが走り抜けた。ウィルス事件以来、深刻な食糧危機が続いていた。人口が多い中国は特に深刻な事態を迎えていた。皆、極限まで飢えていた。

「陳！早くしてよ。ハラペコなんだから」

店の方から、若い女の声が聞こえてきた。

「わかった！すぐに極上の柔肉を食わしてやるよ」

陳と呼ばれた男が、失神している瞳の黒髪を鷲掴みにして、中華包丁を振り上げた。ストンという音がして、鮮血が噴出し、瞳の生首が胴体から切り離された。

さらに、両手両足が付け根から切断された。ダルマになった瞳の乳房や尻が切り取られ、腹部が切り裂かれ、鮮やかな色をした内蔵が取り出された。陳と数人の男達が、瞳の肉を使って料理を始めた。瞳の柔肉が、切り刻まれフライパンで炒められ、大鍋で茹でられた。食欲を誘う匂いが厨房に満ちた。男達は味見をしながら、黙々と調理を行っていた。

「さあ。次はメインディッシュだ」

男達が、舌なめずりをしながらアリサに近付いて来た。

アリサは、自ら、男たちの前で四つん這いの姿勢を取った。何とか生き延びたかった。豊かな尻を妖しく動かした。

「この女、俺達を誘っているのか？」

「お願いです。何でもしますから。助けて下さい。貴方達の奴隷になります」

アリサは、大きく尻を突き出し、太腿を開いた。男たちの一人が、近付きアリサのアヌスを舐め回した。アリサは尻を上下に動かし、男の顔にアヌスを擦りつけた。

「食べ頃ですよ」

男は、愛液に塗れた顔を上げ、指先でアリサのアヌスを犯しながら皆に告げた。アリサは、四つん這いの姿勢

で、両手両足を抑えつけられた。アヌスに滑りのある液体を塗られた。次の瞬間、アヌスに引き裂かれるような激痛を感じた。直腸に硬く冷たい異物が押し込まれていた。激痛のために気を失いそうになった。すぐに、喉元に異物感を感じた。激しい嗚咽感とともに、何かが喉の奥からせり上がってきた。大きく開いた口から、鋭い金属の切っ先が現れた。

アリサは朦朧とした意識の中で、串刺しにされたことを知った。足首を、鉄串に紐で固定され、持ち上げられた。男達によって店内に運ばれた。店には大勢の男女が、たくさんの丸テーブルに付いていた。店の中央に置かれ

た差し渡し一・五メートルはあるコンロの上に固定された。コンロには真っ赤な炭火が燃えていた。すぐに、全身を焼かれる激痛を感じた。

客の中で、若い女が立ち上がり、刷毛でオリーブオイルをアリサの全身に塗り始めた。店中に肉が焼ける香ばしい匂いが広がった。アリサの乳首から、肉汁が滴り落ちた。客達は、皆、焼き上げられるアリサの裸身に、欲情と食欲の入り交じった視線を向けていた。

一時間後、きれいなキツネ色に焼き上がったアリサの裸身に、客達が皿やナイフを持って群がった。脂の載った乳房や尻肉が真っ先に切り取られ、貪り食われた。同様な惨劇が、日本人街の各地で繰り広げられた。

第一章　韓国特殊部隊

深夜〇時すぎ、福井県の高浜町から十キロの海岸部に、韓国の小型潜水艦が着岸した。船体の前半部が、砂浜に乗り上げていた。サブマシンガンや自動小銃で武装した十数名の韓国特殊部隊員が闇夜を利用して、砂浜に降り立たった。

西暦二千二十年、北朝鮮を併合した韓国は、翌年の二千二十一年にアメリカ合衆国との同盟関係を破棄し、隣国の中国と同盟関係を結んでいた。

特殊部隊員が目指すK村は、海岸部と険しい山岳部に挟まれており、一本の県道が通っているだけの陸の孤島であった。県道の両端を封鎖すれば、村人は逃げ出すことはできなかった。

人口千人のＫ村が、深い眠りに落ちている中、一部の特殊部隊員は県道を封鎖し、残りは各家に侵入し、抵抗を示しそうな男をナイフやワイヤで縊り殺した。女子供は縛り付けられ、小学校の体育館に閉じ込められた。

隊長であるキムも単身で各家の制圧を行っていた。村長宅と思われる豪邸に忍び込んだ。広大な敷地に飼い犬の姿は見えなかった。ドアに鍵は掛かっていなかった。無用心だなと内心思いつつ、邸内に侵入した。一階に人のいる気配は無かった。二階から微かな物音が聞こえていた。近付くにつれ、それが女の喘ぎ声であることがわかった。半開きのドアの隙間から、薄明かりの室内を見渡せた。二十畳くらいの広さがある室内の中央に置かれたダブルベッドでは、二十代前半の女と、家主と思われ

る初老の男が絡み合っていた。

男は、女を四つん這いにさせ、背後に屈みこんで女の盛り上がった白い尻を舐めていた。

「そんなにいいのか？」

男が愛液に塗れた顔を上げた。女は無言で頷いた。

「ちょっと待ってろ」

男は立ち上がり、部屋の隅に置かれた小型冷蔵庫を開け、中から精力剤の小ビンを取り出した。キムは足音を忍ばせ、背後から男に近付き、羽交い絞めにして、喉首を掻き切った。その間、数秒あまり、ほとんど物音を立てなかった。

キムは、ベッドで四つん這いになっている若い女に飛びついた。ベッドに上体を押し付け、口を手で塞いで、

首筋にナイフを押し付けた。

「声をあげたら、殺す」

女の耳元で囁くように言った。女は両目を見開き、全身を震わせながらも何度も大きく頷いた。キムは手早く、女に猿轡を噛ませ、ロープで後ろ手に縛り上げた。女を仰向けにして、ペンライトの光を女の顔に近付けた。切れ長の二重瞼を持った細面の顔をしていた。女優といっても通用するような美貌の持ち主であった。目の前にたわわに実った白い乳房が、揺れていた。キムはゴクリと生唾を飲み込んだ。荒々しく鷲掴みにして揉みしだいた。柔らかく、弾力があり最高の感触であった。ピンク色の乳首を口に含み、舌先で転がした。女が目に涙を溜めて、低い嗚咽を漏らし始めた。女のむっちりとした長い太腿

を押し開き、ペンライトで膣を照らし出した。柔らかい陰毛の下に、サーモンピンク色の膣が息いていた。鼻先を近付けてみた。石鹸の香りの中に、隠微な匂いを感じた。キムは低い唸り声を上げて、喰い付いた。舐めるというより、噛むかんじであった。舐め上げ、吸い付き噛んだ。膣に満足した後、何を思ったのか、自動拳銃の銃身に装着したサイレンサーを膣に差し込んだ。何度も出し入れを繰り返した。女は金属の冷たい感触に、最初は身体を硬くしたが、執拗な注送のためか、次第に息が荒くなっていった。最後は、自動拳銃を持ったキムの右腕を、両腿で挟み込むようにして果てた。キムは素早い動作でズボンを脱いだ。黒々とした男根が天を突いていた。ぐったりとした女をうつ伏せにして、背後から膣を刺し

貫いた。中は熱く、濡れていてキムの男根を強く締め上げた。冷たくすべすべな尻の感触に我を忘れた。女の乳房を揉みしだきながら激しい勢いで、腰を前後に振った。

村の中央に位置する駐在所に、韓国特殊部隊のひとりが自動小銃を構えながら近付いていた。駐在所は消灯しており、中に人の気配は無かった。施錠されていないドアを開け、息を殺して中に入った。相手は警察官であり、銃を持っている筈であった。思ったとおり藻抜けの殻だった。男が肩の力を抜いたその時、背後から頭を掴まれ、首を一気にへし折られた。男は自分の首の骨が、折れる音を聞きながら意識を失い絶命した。

死体の横に、三十代半ばに見える屈強な身体付きをし

た長身の男が立っていた。男は、警官の制服を脱ぎ捨て、全裸になった。鍛え抜かれた筋肉の鎧に包まれていた。

男は、駐在所の奥にあるロッカーを、鍵を使って開けた。中から、ボストンバックと長さ一メートルはあるナイロン製の袋を取り出した。ボストンバックを開けて、中に入っていた防弾ベストと迷彩服を取り出した。迷彩服を着て、その上に防弾ベストを身に付けた。

ロッカーの扉に付いた鏡を見ながら、黒墨を顔に塗った。さらにボストンバックの底に入っていたレーザサイト付き自動拳銃と、ホルスターを取り出し、腰に取り付けた。ナイロン製の袋の中には、二十式自動小銃が入っていた。二千二十年に配備された自衛隊の制式自動小銃であり、五・五六ミリ自動小銃と、二十ミリグラネード

ランチャーを一体化したコンビネーションガンであった。五・五六ミリロングライフルの装弾数が三十発であり、二十ミリグラネードランチャーを三発装弾することができた。さらに暗視スコープ機能を有する望遠装置を持ち、測距離計と敵兵の視力低下をもたらすレーザー装置を具備する世界最高レベルのアサルトライフルであった。

男は、二十式自動小銃を構えながら、駐在所の裏にある官舎に向かった。

平屋建ての官舎は消灯していた。男がドアをノックした。

「俺だ。田岡三等陸尉だ」

ドアがすぐに音も無く開かれた。中には、同じように、迷彩服に身を包み、顔に黒墨を塗った男が立っていた。

「敵兵が潜入したようですね」

男は声を忍ばせるようにして言った。

「ああ。駐在所が襲われた。村内の各家も制圧されているようだ」

「貴方達。どうしたの？そんな格好をして？」

奥の方から、若い女の眠たげな声が聞こえてきた。二人は、豆電球の薄明かりの中、部屋の隅に佇む、ネグリジェを着た若い女を見詰めた。大きな瞳を持った美しい女であった。

「静かに話すんだ。この村は、韓国特殊部隊に制圧された。俺と、この大石陸曹とで、これから敵兵を殲滅しなければならない」

「……何を言っているの？こんな真夜中に。冗談のつも

りなの？」

女は大石陸曹と呼ばれた若い方の男に近付いた。

「どうしたのよ。聡？」

不安そうに大石の顔を見上げた。

「説明している暇は無いんだ。里香はここに隠れていてくれ。誰がきても絶対にドアを開けるな」

大石は、優しそうな手付きで、女の頬を撫でてやった。

「あ……。貴方達。警察官では無かったの？」

「お前をだますつもりは無かった。これは任務なんだ。高浜原発を狙って上陸する韓国特殊部隊に備え、我々が極秘配備されたんだ」

「……貴方は、私の聡よ。どこにも行かないで……」

田岡三等陸尉が、里香の背後から抱きつき、エーテル

を含ませたハンカチで口を塞いだ。里香は少しの間、手足をばたつかせたが、すぐに静かになった。

「済まない……」

大石陸曹が呟くように言った。意識を失った里香を寝室のベッドに寝かせ、二人は無言で官舎を立ち去った。

夜が明ける頃には、ほとんどの家は制圧されていた。十数名の腰紐をうたれ、容貌容姿が美しく、素っ裸に剥かれた若い女達と、数百人の中年の男女や老人と子供達が一列となって、韓国特殊部隊員の手によって、丘の上に建つ小学校に連行されて行った。若い男達の姿は見えなかった。皆、韓国特殊部隊員によって殺害されていた。

体育館には老人と子供達が押し込まれ、若い女達三十

数名は音楽室に監禁された。

「隊長。村中を探し回って、やっとこれだけ集めることができました」

キムは、机の上に並べられた食糧を調べた。精米十キロの袋が三袋に、インスタント麺が三十食に、魚の缶詰めが数十缶と砂糖や塩等の調味料が置かれていた。

「これで全部か？」

千人の村でこれだけの食糧とは。日本も食糧事情はやはり切迫しているものとみなされた。

「はい。残念ながら……。捕虜を尋問したのですが、明日の正午に、村人全員で近くの町に避難する予定だったそうです」

「そうか。日本も臨戦態勢に入るのだな。今晩、高浜原

発に向けて進撃を開始する」

今回の作戦は、どれだけ時間がかかるのか見当もつかなかった。探してきた食糧は後続部隊のために、とっておく必要があった。

「おい。伍長。調理場に女を二人連れて来い。浣腸薬を使って腹の中をきれいにしておくんだぞ」

「わかりました」

音楽室に監禁されていた恵美と由香が、校庭裏にある水飲み場に連れ出された。二人とも二十歳になったばかりで、瑞々しく、乳房も尻もはちきれんばかりだった。

二人は、校庭の壁に両手を付け、尻を突き出すような姿勢を取らされた。

「もっと足を開け！雌豚が」

二人の兵士が、女達のアヌスに浣腸薬を一リットル以上、一気に注入した。すぐに、女達は耐えられない排泄感のために気が狂いそうになった。盛り上がった白い尻が震え慄いていた。

「お願い……。トイレに行かせて！」

兵士達はただ、卑猥な笑みを浮かべるだけであった。

「ああ……」

呻き声とともに、大量の排泄物が噴出した。兵士達は、ホースの水で女達を洗浄した。それを何度も繰り返し、排泄物が透明になった時点で、女達を水飲み場のシンクの上に、四つん這いにさせた。兵士達は、女達のアヌスに指先を挿入した。

「ギャー！」

女達が絶叫を上げるのもかまわず、手首まで挿入し宿便を掻き出した。直腸を掻き毟られる激痛のために失神した女達のアヌスにホースを突っ込み、直腸内を洗浄した。

小学校の一階にある調理場には、見張りを除く、特殊部隊員全員が集められていた。調理台上には、全裸の恵美と由香が後ろ手に縛られて、転がされていた。

「お前達。よく聞け。我々の使命は、後続の攻撃部隊のために、厳重な防御体制を突破して、敵兵を撹乱することにある。村で集めた食糧は、後続の攻撃部隊に残さねばならない。しかし、我々とて栄養源は必要だ」

隊長のキムが皆に説明しながら、恵美と由香をじっと見詰めた。隊員達の間に重い雰囲気が満ちた。

「人肉は、忌諱とされているが、滋養が豊富だ。それに捕虜ならいくらでも確保できる」

韓国語を解さない恵美と由香は、不安な表情でキムの顔を見詰めていた。キムが、腰のベルトに差していた軍用ナイフを抜き放った。女達の視線が、冷たく光る切っ先に向けられた。

「これからは、日本の若い女達を我々の食糧兼慰みものとする。犯し、喰らいまくるんだ」

キムは、由香のたわわに実った乳房を鷲掴みにして、軍用ナイフを根元に押し当てた。

「止めて。お願い。殺さないで！」

由香はキムの意図を知ってか、声を震わせ絶叫した。

「ギャー！」

断末魔の叫びが部屋中に満ちた。キムの左手には血塗れの肉塊が握られていた。

「肉はこうやって生で食べろ。ビタミンを補給するんだ」

血塗れの肉塊に喰い付いた。兵士達の栄養状態は最悪で、皆飢えきっていた。乳房を切り取られ、白目を剥いて、全身を痙攣させている由香と、恐怖のあまり意識を失った恵美の裸体に群がった。恵美の裸身が、うつ伏せにされ、むき卵のようにすべすべで白い尻に軍用ナイフが突き立てられた。切り裂いた恵美の尻肉を、兵士達は奪い合い、貪り食った。尻肉を食われ、腿肉を食われた。

腹を割かれ、血塗れの肝臓を抜き取られた。由香の性器が削り取られ、細切れにされた。兵士達は、陰毛がついた膣肉を美味そうに貪り食った。十名の兵士達の食欲

は凄まじく、恵美と由香の肉体はあらかた食され、頭部と骨を残すのみとなった。

午後七時三十分頃、校庭のグランドでは、巨大な焚き火が燃え盛り、周囲を照らし出していた。それを取り囲むようにして、韓国特殊部隊の兵士達が、女達を好き放題に犯していた。白い裸身が、鍛え抜かれた肉体によって、突き抜かれ揺れ動いていた。

「隊長。今日捕まえた女は、婦人警官でした」

男が、半分意識を失いかけた里香を背後から犯していた。犯しながら、豊かな乳房を揉みしだいた。

「そうか。いい女じゃないか。そいつを今晩の夕飯にする」

キムが別の女の口を犯しながら言った。

「脂が乗って美味そうな尻をしていますぜ」

男が、舌なめずりをし、香織の尻を鷲掴みにした。

その頃、校庭を見渡すことのできる小高い丘に、自衛隊員の特殊部隊である田岡三等陸尉と大石陸曹が、腹這いになって様子を伺っていた。

「里香が捕らえられた」

大石が、暗視スコープを覗きながら、重く呟くように言った。

「我慢しろ。任務を忘れるな」

「はい……」

「奴らが酒盛りを始めたら、頃合を見て突入する」

「わかりました」

大石は、暗視スコープのレンズに映し出されている里香が、陵辱される様子から視線を反らすことができなかった。将来を誓い合った仲であった。里香を背後から犯していた男が、軍用ナイフを抜き放ち、首筋に押し当て、一気に引き裂く様子が映し出された。男は、痙攣する里香を仰向けにして、胸の下から膣口までを一気に切り裂き、手を差し入れて、血塗れの肝臓を取り出し、生のまま喰い付いた。大石が愛した乳房が切断され、膣を削り取られ、尻を切り裂かれた。大石は、肩を震わせ、低く呻きながら、里香が生きたまま貪り食われる様子を見ていた。

「この女の肉。美味いな」

「ああ。ケツの肉なんか脂が載って最高だよ」

男達は車座になって、民家から奪ったウィスキーを飲みながら、切り取った里香の尻肉や腿肉を貪り食った。

隊長のキムが、地面に横たわり、全身を切り裂かれ、虫の息となっている里香の口をこじ開け、舌を吸出し、何度かしゃぶった後で、噛み千切った。里香の目尻から一滴の涙が零れ落ち、眠るように絶命した。男達が、里香の手足を切断し、切断面に喰い付いた。

「伍長。体育館に火を放て。捕虜達を焼き殺すんだ。それから、女達を集めろ。五人を潰して、肉を取るんだ。残りの五人は食糧として連れて行く」

数百人の村人が、監禁されている体育館に火が放たれた。火は見る間に勢いを増し、火炎が夜空を焦がした。

内部から、人々の断末魔や呪詛の声が聞こえてきた。焚き火の周りには、全裸にされた五人の女達が、四つん這いに並べられた。皆、若く瑞々しい肢体を持っていた。

男達が背後から一斉に襲いかかった。泣き叫び、許しを乞う女達の膣やアヌスを犯しながら、軍用ナイフを抜き放ち、喉首を掻き切った。彼らの周りでは、残された男達が、残り五人の女達に群がり、したい放題に犯していた。殺戮した女達を焚き火の近くに置かれた簡易ステージに運び、解体作業が始まった。牛や豚のように手足を切断し、腹部を切り裂き、内臓を掻き出した。尻や太腿を切り裂き、ブロック大の肉塊とし、粗塩を塗し込んだ。

「待て。大石陸曹！」

大石陸曹は凄まじいスピードで、小学校のグランドに向けて疾走して行った。大石がいた場所には、精神昂揚剤であるハルシオンＤの包み紙が散乱していた。

ハルシオンＤとは、防衛研究所が開発した薬品で、精神の昂揚を極限状態まで高め、さらに肉体的にも筋力を最大限に引き出す作用があった。ただし、有効期間は短く、使用後は、よくて過度の脱力感に襲われるか、最悪の場合は、精神に異常をきたし廃人となる副作用を有していた。

田岡三等陸尉は、二十式自動小銃を構え、立ち上がり大石陸曹の後を追走した。グラウンドから、軽快な自動小銃の連射音と二十ミリグラネード弾の爆裂音が聞こえ

てきた。田岡三等陸尉が追いついた時には、大石陸曹は、二十式自動小銃を全弾撃ち尽くし、レーザサイト付き自動拳銃で応戦していた。地面に伏せた田岡三等陸尉は、焚き火の周りに倒れている数名の韓国特殊部隊員と全裸の女達を認めた。大石陸曹が、奇声を発し、敵兵の中に突入していくのが見えた。銃弾が大石の身体に集中した。倒れては起き上がり、自動拳銃を撃ち続けた。ハルシオンDの効力と、防弾ベストのお蔭で、大石は奇跡的に敵陣の中に突っ込み、自動拳銃で殺戮を続けた。銃弾が切れても、相手に飛びかかり、軍用ナイフで喉笛を掻ききった。大石は一匹の鬼と化していた。燃え盛る炎に照らし出された大石の目は殺戮に酔っていた。

田岡三等陸尉は、数名の敵兵が壊走に移るのを認めた。

一人も逃す訳にはいかなかった。村の若い女を楯にして、逃走を図った敵兵に対し、女ごと射殺した。罪も無い女は、乳房を撃ち抜かれ、断末魔の叫びを上げながら、敵兵とともに地面に横たわった。田岡の存在に気が付いた敵兵が、応戦してきた。五.五六ミリ弾が左肩先を撃ち抜いた。田岡は苦痛に顔を歪めながらも、立ち上がり二十ミリグラネード弾を三連射した。数名の敵兵と女達の裸身が、爆風とともに吹き飛んだ。田岡も残り少ない敵兵に向かって走っていた。距離二十メートルまで接近した。腹部に激痛が走った。弾頭をテフロン加工した特殊弾が、防弾ベストを貫いていた。見る間に下半身の力が抜けた。その場に膝間付いて、自動小銃の五.五六ミリ弾を連射した。敵兵が血塗れになって、吹き飛ぶ様子が見

えた。一瞬で、かたが付いた。田岡の射撃に対して応戦してくるものは、いなくなった。

再び、辺りに静寂が戻った。体育館は焼け落ち、本校舎に火が移っていた。パチパチと炎が爆ぜる音が聞こえてくるだけであった。田岡は、眩暈を抑えながら、立ち上がった。腹部を触ってみた。左手は、生暖かい鮮血に塗れた。ゆっくりと焚き火に近付いた。女達の肉体の一部であろうか。串刺しにされた肉塊が、炎に炙られ、肉汁が垂れていた。田岡は、周囲を見渡し、大石の姿を探した。大石はすぐ近くに、うつ伏せの姿勢で倒れていた。

田岡は、静かに大石を裏返した。大石は既に絶命していた。両腕の中に、里香の生首を抱いていた。田岡は、一瞬目をつぶり、大きく息を吐き、その場に座り込んだ。

胸ポケットから一枚の写真を取り出した。田舎に置いてきた妻と一人息子が、微笑んでいた。

「諒一。済まない……」

そう呟くように言って、目を閉じた。田岡は座ったままの姿勢で、そのまま息を引き取った。

第二章　開戦へと続く